様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０６５３

研究課題名（和文）公害資料館というメディアの役割

研究課題名（英文）The Museum as Media: How the Stories of Public Health Hazards are Told

研究代表者
池田　理知子（IKEDA, Richiko）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：５０２７６４４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：公害資料館をメディアとして捉えた場合、そこが来館者と何を結びつけようとしているのかが問われる。それは、展示物というモノを通してかもしれないし、「語り部」の講話を通してかもしれない。しかし、資料館という「ハコ物」が伝える内容には自ずと限界があり、せいぜいそこは各自をそれぞれの問題意識へと導くためのきっかけを与える「入り口」と考えなければならない。そのためには、そこにすべての答えがあるとか、「語り部」という当事者が当事者ではない聞き手に公害のことを教えてくれるといった思い込みを捨てる必要がある。今回の研究で明らかになったのは、そうした思い込みの具体的な姿であった。

研究成果の概要（英文）：The central focus of my present research is to grasp the connection between the kogai (health hazard incidents) museum and the visitor in the specific terms of how the museum operates as a medium that leads visitors to seek greater involvement, through exhibition and/or the talk of kataribe (narrator). My research findings follow: We must realize that the museum conveys only limited messages and functions as a “guide” to give incentives to the visitors for further investigation of their own. We need to put aside our preconceptions that a museum has the right answer and that the kataribe, who lived in the time of kogai, explain what happened “in those days” to an audience of spectators, not tojisha (persons/parties concerned).

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：メディア　コミュニケーション　資料館　語り部

１．研究開始当初の背景

「負の遺産」を伝えようとする博物館／資料館が何を記録し、それによってどのような記憶が紡ぎだされてきたのかを明らかにしようとする研究は、戦争という文脈に限っていうならば、これまで様々な試みがなされてきた。例えば、加害記憶の伝達と継承に関して戦争博物館がこれまでどういった姿勢を取り続けてきたのか、これからどういうことがなされなければならないのかを問い直す論考などがあった。また、長崎原爆資料館の加害展示を巡る問題や沖縄県平和祈念資料館展示改ざん問題などが多数の論者によって議論されているとか、スミソニアン航空宇宙博物館におけるエノラ・ゲイの展示を巡る論争に関しても多くの既出論文があるといった状況がある。被害だけではなく加害も含めた戦争の記録・記憶の再構築が、こうした一連の研究の主題となっており、博物館／資料館の政治性を問う研究の一翼を担っているといえる。

しかし、ひとたび戦争という文脈から離れ、本研究の主題である「公害」を伝える資料館の考察となると限定的であった。戦争と核、公害という「負の歴史的遺産」を保存・記憶することの意味を問う論考や、琵琶湖博物館との比較から、水俣市立水俣病資料館が存在する意味がどこにあるのかを問う小論など、数えるほどしかなかった。したがって、そうした研究があまりなされていない分野を補うという意味でも本研究がなされなければならなかったといえる。

またそれ以上に、発生から 50 年余もたった今、なぜイタイイタイ病や四日市公害を伝える資料館が新たに建設されようとしているのかの意味を考えていこうとした本研究が、社会的にも望まれていたことは間違いないだろう。

２．研究の目的

公害資料館をメディアとしてとらえたとき、それらが何をどのように伝えているのかを探り出すことが、本研究の目的であった。つまり、そこがどういったメッセージを発信しようとしているのか、来館者とどういった関係性を結ぶ場として機能しているのかを明らかにするものである。資料館の役割は多岐にわたるが、ここでは展示と「語り部」を中心とした語り手に絞って分析を行うこととした。具体的な研究課題は次のようなものであった。

（１）公害資料館が「公害を伝える」ことの意味は何なのか。

（２）公害資料館が伝える「公害」とは具体的に何なのか。

（３）公害資料館および「語り部」の講話が、来館者とどのような関係性を生み出す場として機能しているのか。

この３点の検証を新規の資料館であるイタイイタイ病と四日市公害、そして既存の熊本と新潟の水俣病の資料館で行い、「負の遺産」がどのように「記憶」され、「記録」されるのかを考察することが、本研究の目的であったといえる。

３．研究の方法

研究方法は、主に以下の二つに集約される。

（１）文献の整理・分析

① 比較的研究が進んでいる戦争の記録と記憶の継承に関して、何がこれまでに明らかになったのか、そしていまだに残されている問題とは何かを整理・分析した。特に、成田龍一や屋嘉比収、米山リサらの著作を再読して、整理を試みた。また、ナチによるユダヤ虐殺の場所の考察を行ったサイモン・シャーマの「風景と記憶」は、資料館が建つ場所がどこなのかという、より広いコンテクストに位置づけてそこを眺めることの必要性を示唆してくれた。

② 博物館／資料館をメディアとしてとらえる枠組みのなかで、これまでの理論および研究を整理した。そこが何を展示し、どういうメッセージを発信してきたのかを近代の国民国家成立との関連性から考察した研究（例えば、吉見俊哉の研究等）や、博物館／資料館における展示とそこでの交流の様子を実証的に示した研究（例えば、布谷知夫の研究等）の整理、分析を行った。

（２）　公害資料館でのフィールド・ワーク

① 水俣市立水俣病資料館

常設および企画展示の分析と、「語り部」の講話の分析を主として行った。また、2016 年の大幅な展示のリニューアルに向けて、解説員養成講座を２年にわたり資料館が実施したため、その参与観察も行った。さらに、資料館を含めた水俣のガイドを行っている様子の参与観察をした。年間５万人近くの来館者があるこの資料館は常に何らかの動きがあるため、フィールド・ワークの中心は水俣であったといえる。

② 新潟県立環境と人間のふれあい館―新潟水俣病資料館―

常設および企画展示の分析と、「語り部」の講話の分析を行った。ただし、この資料館に関してはそれほど変化が見られなかったため、ここでのフィールド・ワークは前半で打ち切った。

③ 富山県立イタイイタイ病資料館

常設展示の分析を行った。「語り部」の講話の分析も試みるつもりで、１回は参加したものの、開館当初の１年間は「語り部」の講

話への相席が制度として確立していなかったことと、水俣の資料館と比べて頻繁に講話が開かれていないという理由で、展示の分析終了後はそこでのフィールド・ワークを打ち切った。

④ 四日市市立四日市公害と環境未来館
　当初の予定よりも開館が遅くなったこの資料館における展示の分析は科研の最終年度に１度だけしか行えなかった。だたし、開館に向けての市および民間団体である四日市再生「公害市民塾」のさまざまな動きを見ることができたのは大きな収穫であった。結果的に四日市でのフィールド・ワークが水俣と合わせて今回の研究の中心となったといえる。

⑤ その他
　上記以外にも、次のような資料館／博物館でのフィールド・ワークを行った。三重県立博物館、岡まさはる記念長崎平和資料館、西淀川の大気汚染を伝えているエコミューズ、大阪人権博物館、芦浜原発反対運動の拠点となった海の博物館等である。さまざまな博物館／資料館の具体的な活動内容を知ることは、本研究を進めるうえで大いに参考になったことを記しておく。
　また、水島財団主催の水島コンビナートによる大気汚染を学ぶ学習ツアーや、軍艦島のツアーなどにも参加し、調査を行った。これらの調査を通して、資料館研究をより広い文脈において考える必要性があることを実感したことも付け加えておく。

４．研究成果
　３年間の本研究の成果は大別すると、（１）資料館における展示の分析に関してと、（２）資料館における「語り部」の講話の意味について、（３）公害を語り継ぐことの意味についての３点となり、詳細は以下のとおりである。

（１）資料館における展示の分析に関して
① 資料館における展示はパネルであれ「実物」であれ「モノ」である。しかしその「モノ」には何らかの形で人が関与している。誰がそれをそこに並べるために選んだのかもそうであり、その「モノ」を介して来館者と資料館側との「交流」も生まれ得る。そうした「交流」を通して、いままで見過ごしてきたものや、これまで避けてきたものに来館者が気づきはじめることもあるだろう。そういった観点から公害資料館を検証してみると、いずれの資料館も「交流」を促すような仕組みの構築がうまくなされているとはいいがたいことがわかった。イタイイタイ病資料館や四日市公害の資料館では、開館当初から解説員制度が導入されているが、そこに来館者と相互に学び合うという姿勢があるかというと、疑問の余地が残る。ただし、四日市は開館したばかりであり、今後の動きを見ていく必要がある。
　また、資料館の展示にすべての回答があるわけではなく、展示には自ずと限界があることをまず認識する必要がある。琵琶湖博物館の設立に準備段階からかかわった嘉田由紀子が言うように、資料館は「必要悪」であり、「フィールド」へ出ていくための「入り口」として位置づけるしかなく、本来ならばそうした「ハコ物」はないに越したことはない。したがって、そこにすべての答えが見出せるわけではなく、そのことを私たちが自覚しつつ、実際の「フィールド」へ出ていく必要があるのだ。そしてそれは、公害が発生した地域に限らず、私たちが暮らす地域のなかや、もっと身近な日常のなかにあるのかもしれない。そういったことを考えるきっかけを与えてくれるのが、「入り口」としての資料館なのである。

② イタイイタイ病資料館の展示に関しては、ジオラマや映像という「媒介物」を通して公害を伝えることの意味が何なのかを特に分析・考察した。そうした「媒介物」が伝えているのは、ひとつの物語であり、その物語を音声で聞かされ、映像によって見せられる来館者は、そのなかでは語られないものを想像する機会を奪われてしまうかもしれない。映像を使うことによって何が得られ、何が失われるのかを見極める必要がある。展示の「行間」を読むことを可能にする資料館のあり方とはどういうものかを考えていくことの重要性が、この分析によって明らかになったといえる。

（２） 資料館における「語り部」の講話の意味について
① 「語り部」の講話に関しては、水俣病資料館での調査が中心となった。そのなかで明らかになったのが、自分にとっての水俣病とは何かを患者家族として語る「語り部」の講話に「当事者性」とは何かを考えるヒントがあることや、そこに非体験者が水俣病を語り継いでいく可能性が開かれるのではないかということ、市が運営する公的な場としての資料館が発揮する規律型権力と「語り部」の語りとの関係、「語り部」の講話の場がオルタナティブ・メディアとしての可能性をもつこと、つまり資料館という公的な場が物語る「大きな物語」に対して、「語り部」が語る「小さな物語」が対抗的言語となりうる可能性があることなどである。
　また、水俣病患者や家族がどういった被害を受けたのかを知るために講話を聞きに来たオーディエンスに対して自らの加害体験を語る「語り部」がおり、講話の場の多様性がそこから見えてきた。しかもその「語り部」は潜在患者を発掘するためのメッセージをそこで発信しており、いわば支援者としての語りをも実践している。講話とは「語り部」

の体験を聞くだけの場ではないことがそこでは示されているのである。

② 水俣病資料館では、「語り部」の講話は人権教育の場と位置付けられている。しかし、そこで意味する人権教育とは狭義の意味であることが、ある「語り部」の講話の分析で明らかとなった。正しい知識をもっていれば、差別や偏見をなくせるはずだという「偏見理論」に基づいて理解しようとすると、その「語り部」が語る「差別はなかった」というメッセージから覗く「日常的差別」を見過ごしてしまう。水俣病患者であれば差別を受けたであろうという思い込みを一旦括弧に入れると、患者が歩んできた多様な人生が見えてくるだろうし、水俣病の複雑さを垣間見ることができる。日常的差別を考える豊かな人権教育の場をこの「語り部」の講話は提供していることが、今回の分析・考察でわかってきたといえる。

（３） 公害を語り継ぐことの意味について

公害がひどかった時代を体験していない、いわゆる次世代の語り手が公害資料館で何を語れるのかについての研究においても、特に四日市公害の資料館の準備段階の調査から、ある一定の成果があったといえる。民間団体である「なたね通信」の連続 10 回講座や、四日市再生「公害市民塾」（市民塾）の連続 10 回土曜講座の分析・考察を通して、次世代が公害を語ることの困難さと可能性が見えてきた。過去のこととされがちな公害を現在の問題でもあるのだということを伝えるのは難しい。裁判闘争が続いていたり、患者の数が増えたりといった目に見える変化が見えない四日市では、なおさらである。しかし、過去と現在、未来とのつながりのなかで公害を捉えるという視点を導入するならば、次世代だからこそ語れることもあるはずだ。そういったことが、四日市公害を伝える取り組みを行っている民間団体の動きを追うことにより明らかになってきた。

なお、市民塾が行った土曜講座は「きく・しる・つなぐ――四日市公害を語り継ぐ」というタイトルで風媒社から本として出版されるに至り、その本の「まえがき」の執筆を研究代表者が担当した。また、市民塾主催の市民集会では、その本の出版の意義について対談形式の講演を研究代表者が行ったことを付け加えておく。研究成果の一般市民への還元という意味では重要なアクティビティだったのではないかと思っている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 池田 理知子、多様な意味を生みだす講話の場――水俣病資料館のある「語り部」の事例から考える、日本コミュニケーション研究、査読有、2015、43 巻、印刷中

② 池田 理知子、四日市公害を語ることの困難さ、日本研究のフロンティア、査読無、2014、57-71

③ 池田 理知子、「日常的差別」に関する一考察――水俣病資料館のある「語り部」の講話から、日本コミュニケーション研究、査読有、2014、42 巻、15-30

④ 池田 理知子、水俣病／水俣病事件を語り継ぐための模索――対話形式の語りの場の可能性、スピーチ・コミュニケーション教育、査読有、2013、26 巻、5-23

〔学会発表〕（計７件）

① 池田 理知子、「きく・しる・つなぐ――四日市公害を語り継ぐ」出版の意義、四日市再生「公害市民塾」主催市民集会、四日市本町プラザ、四日市市、2015 年 3 月 7 日

② 池田理知子、公害を語り継ぐためには――四日市再生「公害市民塾」連続 10 回土曜講座から考える、第 12 回日本コミュニケーション学会九州支部大会、大分ホルトホール、大分市、2014 年 10 月 4 日

③ 池田 理知子、水俣病資料館の講話の場のもつ意味――新人「語り部」M を通して考える、第 44 回日本コミュニケーション学会年次大会、琉球大学、那覇市、2014 年 6 月 22 日

④ 池田 理知子、メディアとしての「語り部」が伝える地域の記憶と現在、第 11 回日本コミュニケーション学会九州支部大会、長崎純心大学、長崎市、2013 年 9 月 28 日

⑤ 池田 理知子、四日市公害から考える語りの継承と拡がり、第 43 回日本コミュニケーション学会年次大会、立教大学、東京都、2013 年 6 月 22 日

⑥ 池田 理知子、「媒介物」を通して公害を伝えることの意味――「イタイイタイ病資料館」の展示を通して考える、第 10 回日本コミュニケーション学会九州支部大会、熊本学園大学、熊本市、2012 年 10 月 6 日

⑦ 池田 理知子、水俣病／水俣病事件を語り継ぐための模索――ある語り部補助の試みから考える、第 42 回日本コミュニケーション学会年次大会、京都文教大学、京都市、2012 年 6 月 17 日

〔図書〕（計６件）

① 池田 理知子、ナカニシヤ出版、日常から考えるコミュニケーション、2015、印刷中

② 池田 理知子 他、ナカニシヤ出版、メディア空間論、2015、印刷中

③ 池田 理知子 他、くんぷる、いま、「水俣」を伝える意味、2015、印刷中

④ 池田 理知子、ナカニシヤ出版、シロアリと生きる、2014、172

⑤ 池田 理知子 他、ナカニシヤ出版、メディア・リテラシーの現在（いま）――公害／環境問題から読み解く、2013、248

⑥ 池田 理知子 他、せりか書房、時代を聞く――沖縄・水俣・四日市・新潟・福島、2012、263

６．研究組織

(1)研究代表者

池田 理知子（IKEDA, Richiko）
国際基督教大学・教養学部・教授
研究者番号：50276440